

# 山本厚太郎教授への献辞

白鷗大学教育学部特任教授

岡 田 晴 恵

山本厚太郎先生は、1987年4月より白鷗大学経営学部にて非常勤講師として来られ、また1997年4月よりは当時の白鷗大学女子短期学部を併任して1999年3月まで教鞭を執られました。そして、引き続き1999年4月より白鷗大学経営学科の専任教員・特任教授として着任され、2007年4月よりは発達科学科の所属として、32年間の長きに亘って白鷗大学の発展に貢献されました。その山本先生が2019年3月31日付けで定年退職されるにあたり、これまでのご貢献に感謝するため、さらに先生の2019年4月1日よりの白鷗大学名誉教授御就任をお祝いして本稿を寄稿させていただきます。

山本先生は、本学で「社会学A」「社会学B」さらに教養特講「地球環境問題」を受け持たれました。全学教育科目であり、いずれも抽選講義となっている人気講義です。シラバスの「大学の学びでは問題を提起する力が求められ、また、その問題がなぜ、そうなっているのか？または、もっと良い方法があるのではないか？どのような考え方をしたらよいのか？こうした問いかけが次代の進歩を生み出す原動力となる」という内容に惹かれて、私も多くの学生さんにまぎれて聴講させていただいておりました（すみません）。こうして、私自身が学びますうちに先生の説明に“言葉の力”のようなものを感じていました。さらに先生の講義には、一本貫き通している意思のような“信念”があるように思われました。そのような強い思いを感じましたとき、ふと15年前に私が手にしました先生の著書を読み出していました。

2004年春、私は神保町の岩波書店の1階応接室で、担当編集者と打ち

合わせをしていました。岩波ジュニア新書の執筆依頼を受け、編集者の女性が執筆のご参考にお好きな本を何冊かお選びくださいとの主旨で、数枚の既刊本リストを見せてくれました。そのときに私が選んだのが、山本コウタロー著「ぼくのピース・メッセージ HIROSHIMA'87-'97への道のり」(岩波ジュニア新書・1990年)でした。当時、私はまだ前職の厚生労働省の研究所勤務で、大学院の頃に行ったチャリティー・コンサートを思い出して選んだのだと思います。帰りの電車の中で読みますと、この本で先生は生い立ちから、中学高校、そして大学生生活、音楽活動、ラジオのディスクジョッキー (DJ) から米国留学までの道のりを正直に書いておられました。さらに何をどう感じ、どう考え、それに対し自分がどうしたら良いかを思考し、実際にこのように行動していったという自己形成の道程を真摯に若い世代に伝えておられたのです。

先生は1948年、千代田区四番町で生まれ、番町小学校に通っています。東京のと真ん中中でも、当時は原っぱがあり、いちじくや枇杷の木が生え、空襲で焼け残って鉄骨がねじ曲がった残骸の側には防空壕の入り口が暗く口を開けていました。家から歩いて靖国神社の例大祭に行けば、傷痍軍人が非常につらい姿で並び、物乞いをしていました。戦後生まれではあっても、不発弾、傷痍軍人、防空壕、そして、物の不足した時代の厳しい生活状況に子供心にも“戦争というもの”がしみこむように理解できたのです。

1953年に日本テレビが開局されると、山本少年はその正面玄関にあった街頭テレビを見に自転車で出掛けます。やがて家にテレビが来ると、父の側で戦争の回顧ドキュメンタリー番組を目にしたのでした。ノルマンディー海岸に屍が累々と漂い、チャーチルが上機嫌で葉巻をくゆらす姿、息子を失って泣き叫ぶ母親の映像に強い矛盾と嫌悪を感じました。戦争は残虐で過酷なものであり、人の生きる権利を踏みにじるものだと、戦争は絶対に「嫌だ!」と思ったのでした。

この先生のお父様も、上智大学英文科在学中に学徒出陣で出生し、結核を発症して内地に戻されています。抗生物質ペニシリンが初めて大量生産

され始めたのは、ちょうど第二次世界大戦中の米国でした。その後、結核に効くストレプトマイシンが開発され、日本で使用できるようになったのは戦後しばらくの時を経てからのことです。当時の（まして物資の乏しい戦中では）結核はまさに死に至る病であり、その患者数の多さに国民病とも亡国病とも言われていました。戦地に行ったきり帰らなかった友人達、そして自身の結核という病、英文科であったならばアメリカの国力を知り抜いておられた事を思うと、戦中戦後のつらさは大変なものであったでしょう。「父の悲しさ、無念さは私の心にも伝わってきた」とあります。

そして、同じ千代田区の麴町中学校に入学。野球好きな先生はこの頃、草野球チームを作りました。白鷗大学でも硬式野球部の部長をされています。ドラフト指名後の記者会見場にも先生は同席され、選手（学生）の膝がガタガタと震えているのを見て「こんな凄い選手でも、ドラフト指名ではこんなに緊張するんだと思った」と講義で話されておられました。先生は、学生と同じ目線に降りて、寄り添っておられました。

この中学時代にレイ・チャールズの「わが心のジョージア」を偶然に聴き「背中がゾクゾクとしてなぜか涙があふれんばかりに」となって、「野球も大好きだけれど、音楽のほうが好きなのかな」と思い、「私の人生を変えた曲」となったとされています。こうして、中学時代からバンドを組み「フォークソングはいいな、歌って楽しいな」と思うようになりました。

そして、東京都立日比谷高校に入学。サッカー部でゴールキーパーに選ばれます。当然、音楽活動も続け「ギターばかりを毎日毎晩ジャンジャカ弾いていた」日比谷時代でした。「ワリッド・メン」というバンドを組み、文化祭などに出演。人前で歌う前に歌詞の意味を知ろうと訳しているうちに、当時のアメリカの若者が率先して参加した公民権運動やベトナム反戦運動等に裏打ちされた詩の数々が現れてきて、アメリカン・ニューフォークの奥行の深さに改めて感銘を受けました。すると、ますます音楽にのめり込んでいきます。日比谷高校と言えば、東大合格者最多の超のつく有名校。クラス中が受験一色になっている中で、高校3年の文化祭でも好きで

たまらないフォークソングを歌い、東大受験に失敗。浪人生活を経て、上智大学在学中に一橋大学社会学部に合格、転学しました。1969年のこの年は、学生運動が頂点に達したときで、学生たちが占拠した安田講堂に警察機動隊が導入されて東大入試は中止。東大を目指しながらも受験の機会がなかったのです。しかし、浪人時代に「考えたこと、悩んだことが、いまの精神的支えになっている」ことや上智大学から再受験するにあたり「人生の進路を決定するにあたって時間的余裕を与えられた」ことは、得難い経験となりました。

1969年春、一橋大学社会学部入学。学生運動や音楽活動を再開し、フォーク・グループ「ソルティ・シュガー」を結成。この頃は「言葉の力が重要な時代で、だれが何を考え、何を表現するのかがとても興味をもたれた時代」で、「自分の考えを言葉に表現することがたいへん価値があることと感じられ」ました。その中で、先生は「その昔、日本はアメリカに負けるという予測を確認しあった友人たち」が「学徒出陣で戦地に赴き、無事に帰ってこられたのは五人に一人という状況だった」ことを「あれはしかたがなかった」と語った父の言葉に、自身の生き方を見つめます。そして、しかたがなかったのではない「しかたがある」生き方を自分はしていると考えたのです。「危機は小さい芽のうちにつんでおくことが大切」で、なにか大変な事態になったときにも「自分はこれだけのことをやった」と言える生き方をしようと決意したのです。

この決意は、先生の生き方にそのまま直結しているように思われます。たとえば、HIROSHIMA'87-'97のチャリティー・コンサートの開催においても、戦争はダメだという思いと音楽は人の心を動かす力があるという確信（「音楽できっとなにかができるはずだ。大きくはないけれどしたたかな力があるはずだ」）、さらに一人一人の力は小さくとも多くの人々が同じ意思を持つことによって、世の中を動かすことができるのだという明確な希望が、先生に行動を起こさせたと思われます。

さて、私が小学校1年生の頃、学校の昇降口を「走れ走れコウタロー」

と歌いながら走りまわっていた同級生の男の子がいたのが思い出されます。国民的に有名な「走れコウタロー」（第12回レコード大賞新人賞）の曲は、ソルティー・シュガーの練習に山本先生が遅刻してくることを歌った曲を「ちゃんとした一曲にしよう」と歌と競馬の実況中継を組み合わせで完成しました。1970年3月にレコーディング、7月に発売されています。1970年は万国博覧会が開かれ、学生運動は挫折を迎えて、フォークソングも新たな変化の訪れが予感される頃でした。ソルティー・シュガーはラジオ番組のレギュラーを持つまでになっていましたが、メンバーの一人が21歳の若さで急死し、先生は悲しみに打ちのめされます。

やがて、学生運動も収束していき、そのような時代風景や若者の気持ちの流れに添うように音楽もみんな、全体から個人、一人の内面を表現するかのように変化していきます。吉田拓郎氏の「結婚しようよ」井上陽水氏の「傘がない」かぐや姫の「神田川」などの曲がヒットしました。

山本先生は1971年から「バック・イン・ミュージック」という深夜放送のディスクジョッキーを始められ、以降8年間勤めます。ラジオのDJは、中学生の頃からの憧れであったそうです。音楽の方は、ソルティ・シュガーの後には「武蔵野タンポポ団」「少年探偵団」を結成して活動、吉田拓郎氏らと「ユイ音楽工房」という音楽会社も作っています。

そして、1972年とうとう大学4年生となり、社会心理学の南博先生のゼミで卒論をまとめられました。この南先生との卒論でのやりとりを先生は講義の中で紹介されていますが、「山本君、君は卒業する気はありますか?」「もちろん、あります」（中略）ならば「僕の前で一曲歌ってください、それで卒論と認めましょう」と言われた南先生に、山本先生は内心「しまった!」と思い、すぐに「先生、僕、卒論を書きます」と言って提出したのが「吉田拓郎・スーパースター」という原稿用紙350枚の卒業論文でした。

「この論文を書いたときの視点は以下のようなものであった。外はベトナム戦争、内は安保改定や大学紛争、赤軍派や沖縄返還問題で荒れにあ

れた激動の1970年前後の政治経済を含む広い意味での社会的背景を縦軸に、そんな世相が市井の若者たちにどんな影響を与え、どんな行動様態や思考変革をもたらしたかといった若者の生態を横軸にして、そんな中で若者の歌＝フォークがどのように展開したかを論考しながら、拓郎がスーパースターも成り得た数々の要因を導きだそうとしたものであった」と先生は、後に出版された「誰も知らなかった吉田拓郎」（山本コウタロー著 2009年）に書かれています。「優」をもらって大学卒業、DJと歌の自由業で社会に出ます。そして、1974年ウィークエンドというグループを組み、「岬めぐり」が大ヒットしたのです。

1978年6月、このウィークエンドを解散、ラジオのDJも辞めて、単身アメリカに旅立ちます。「自分自身を白紙に戻して、音楽からも一度は離れて、自分が本当に何をやりたいのかを見つめてみようとした」のです。しかし、「ロサンゼルスでブルー・スプリングススティーンのコンサートを聴くと涙が出るほど感激してしまって」すぐに「やはり自分は音楽が好きなのだということをアメリカで再確認することになった」のです。そして、この米国留学で「いまの自分をきちんと表現することが大切」であり、「何を表現していくか、それが大切なのだ」と思い知ります。「アメリカのミュージシャンたちは自分のメッセージを伝えることをとくに大切にしている」ことを感じ、「自分が本当に言いたいことを、一番気持ち良い方法で表現していけばいい」と気づいたのです。そして、山本先生は帰国後、“戦争は嫌だ、核兵器はもうやめてほしい”という思いを平和コンサートの開催という行動で実践、伝えて行こうとするのです。

この平和コンサートの企画、準備、実現と収支（初年度は大赤字となり寄付には至らず、次回以降はその反省を生かす）、さらに翌年以降も具体的な寄付の目標額と使用目的（3億円、高齢被爆者の養護ホーム建設）を定め明示して継続開催して行く経緯は、「僕のピース・メッセージ」に熱く語られています。熱く語ると書きましたが、先生の言葉や文章には思いの伝わる力があります。わかりやすく伝え、人の気持ちを動かす力があり

ます。山本先生といえば音楽と、音楽であまりに有名であるためにそう思われるのですが、著作にも大きな業績があり、高校大学生世代には必読の書であろうと思われます。また、そんな先生の講義を受けられた白鷗大学の学生（私も含めて）は、幸運であったと思います。

山本先生は大事なことは、「一人ひとりの心に潜む暴力」があり、それに打ち勝つために「まずは平和の心をもちたい」「それはあたえあう心」であるとしています。そして、平和な心とは「違いを認め合う心」であるとしています。さらに反戦、平和を願うとともに今、緊急性をもって重大問題となっているのが「地球環境問題」と指摘されています。私たちは「この問題の被害者であり、同時に加害者である」ことも直視しなければなりません。先生は「人間が汚した地球を少しでもきれいにすべきではないでしょうか」と問いかけます。「今日の世代の浪費の結果は、将来の世代の選択の余地を急速に奪いつつある」ことを実感し、「ムダをやめ、そしてリサイクル」する積極的なエコロジー・ライフを提唱しました。この地球という生命体を取り巻く「地球環境問題」と加害者であり被害者でもある人との関係性を掘り下げ、人の「英知」を信じて、一人ひとりが「水でも、電気でも、ほんの少しの節約」をしてもらいたいと話します。そして、先生は白鷗大学教養特講で「地球環境問題」を講義されました。まさにこれから生きる若い学生の皆さんに届けたい講義であり、多くの学生さんが参加しています。私の専門の感染症だけを見ましても、地球環境の変化に影響を受けて、その発生、さらに流行形態が目まぐるしく変わっています。このような重要なテーマの特講が引き続き継続することを願ってやみません。

先生の献辞をうけ賜りました幸運に本文をしたためながら、先生が大変に積極的に能動的に広い世界に生きてこられたことに感動しています。そして、ふと約40年前の私の高校の修学旅行の記憶が甦ってきました。広島から小豆島へ渡り、島巡りのバスの中で同級生の男子学生が歌っていたのが、まさに「岬めぐり」でした。「くだける波の あのはげしさで あ

なたをもっと 愛したかった」とあるように岩に打ちつける白波が青い海に美しく映えて、今も目に残っています。先生は実はくだけの波のはげしさで、信念のもとに生きてこられたように私には思えてならないのです。

山本厚太郎先生のご健康とご多幸を祈念しながら、先生への献辞の言葉を終わらせていただきます。先生、本当にありがとうございました。また、今後ともよろしくお願い申し上げます。

#### 引用・参考文献（いずれも山本厚太郎先生の著書）

「ぼくのピース・メッセージ HIROSHIMA'87-'97への道のり」岩波ジュニア新書

「誰も知らなかった吉田拓郎」文庫ぎんが堂

「アメリカあげます！」小学館

「ぼくのエコロジー・ライフ」労働旬報社

「ぼくの音楽人間カタログ」新潮文庫

「燃えよ エコトピアン」晶文社